

# 全オンライン授業に対応した初等家庭科教育法のシラバス提案

むら た しん た ろう<sup>1</sup> ・ おお もと く み こ<sup>1</sup> ・ きし だ らん こ<sup>2,3</sup> ・ みなみ ち さと<sup>3,4</sup> ・ わ だ ひろ こ<sup>3</sup>  
村 田 晋 太 朗<sup>1</sup> ・ 大 本 久 美 子<sup>1</sup> ・ 岸 田 蘭 子<sup>2,3</sup> ・ 南 千 里<sup>3,4</sup> ・ 和 田 博 子<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 健康安全教育部系（家政教育部門）・<sup>2</sup> 京都市総合教育センター

<sup>3</sup> 本学非常勤講師 ・ <sup>4</sup> 附属平野小学校

(2020年5月20日 受付)

本研究の目的は、初等家庭科教育法を全オンライン授業により円滑に運営・実施することを目指して、学生の実態を踏まえてシラバスを検討・改訂し、大阪教育大学初等家庭科教育法のモデルシラバスを作成することである。加えて、今後のオンライン授業作成のための資料を作成することである。初等家庭科教育法は、同時期に複数時間開講されており、複数の教員が担当（非常勤講師も含む）している。そこで、受講生全体の実態を把握するため、オンラインで回答できるアンケートフォームを作成し、回収を行った。結果として、家庭科に対する好意度や捉え方に関する傾向や学修ニーズを把握することができた。学年間による有意な差は確認できなかったため、全オンライン授業に対応した共通シラバスを作成した。

**キーワード：**小学校家庭科、教員養成、オンライン授業、初等家庭科教育法、パフォーマンス課題

## I 研究の背景及び目的

### 1. 研究の背景

2020年1月16日に国内初の新型コロナウイルス感染者が確認された。3月末ごろより感染者数が急増したことに伴って、4月7日に「緊急事態宣言」が内閣総理大臣より発せられた。本学では、2020年3月31日付け「新型コロナウイルス感染症の拡大防止期間における授業の実施について」において、2020年4月19日まで休講措置、4月20日から5月9日までを「新型コロナウイルス感染症の拡大防止期間」として、インターネットを活用した授業を実施することとなっていた。感染拡大の状況を踏まえて、さらに2020年4月22日付で原則として前期のすべての授業科目を原則「インターネットを活用した授業（以下、全オンライン授業）」とした<sup>1)</sup>。2020年4月3日に「オンライン授業説明会」がウェブ会議システムで実施された。そこでは、インターネットを活用した授業の5つのモデル提示された。インターネットを活用した授業として、本学では既に構築され一部で使用されているLMS(Learning Management System)であるMoodleを活用して進めていくことが推奨された。以上のように、短期的にすべての授業をオンライン授業化にするためのシラバスや授業計画の再検討を余儀なくされた。

全オンライン授業による授業計画を改善するにあたって、授業の性質によってそれぞれ授業を実施する際の課題は異なるのではないかと考える。例えば、授業規模として、大講義室で行われる教養基礎科目のような大規模の授業、100人以下の中規模の授業、各コースで開講される小規模の授業があると推察される。また、複数で1つの授業を受け持つオムニバス形式、単独で受け持つ形式、複数の教員が単独で同じ授業を受け持つ形式など、教員の配置でも分類できる。授業の規模や教員の配置の状況により課題は異なる考える。

筆者らが担当する初等家庭科教育法は、中規模の授業であり、さらには複数の教員で同時期に複数の同じ科目の授業を開講するものである。初等家庭科教育法のような中規模の授業におけるオンライン授業に関する研

究として、永田ら(2003)は、CSCL(Computer Supported Collaborative Learning)環境を通して、同学年・教育実践経験の多い大学院生・大学教員との相互作用を行い、どのような学習指導案作成が行われるかを明らかにした。だが、全オンライン授業を想定した研究はこれまで確認できておらず、今回のような不測の事態に備えて、どのようにオンライン授業を準備するのか検討する必要があると考える。また、今後もオンライン授業が継続されていく可能性も含め、初等家庭科教育法のシラバス内容の検討が必要である。

## 2. 大阪教育大学初等家庭科教育法の課題

本学の初等家庭科教育法は、免許法施行規則による区分としては、「第2欄 教科及び教科の指導に関する科目 各教科の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」である。小中教育専攻の学生は小学校普通免許授与における必修科目である<sup>2)</sup>。

本学の初等家庭科教育法は、履修人数の関係で所属するコースで授業は割り振られており、2年生もしくは3年生で開講されている。表1に前期開講の初等家庭科教育法の実施時間や受講する学生のコースを整理する。担当教員は、本学の専任教員もしくは非常勤講師の複数の教員である。令和2年度は、夜間コースも含めると前期に5授業、後期に4授業が開講予定である。年間を通して、全9授業を運営するものである。受講生は、各クラス50人から80人程度の人数であり、中規模の授業である。授業は昨年度より、テキストが指定されており、そのテキストを活用しながら授業は進められる。シラバス(表2に本年度改訂前のものを示す)は共通であり、授業の細かな展開については、各担当教員の裁量となっている。前期の5授業は、教育実習前の3年生と2年生が同時期に開講されている。表1にもあるように、模擬授業の時間や学生同士の細かな対話を設定し、対面で実施することが前提で設計されたものである。

前述したように、前期のすべての授業がオンラインで行われることを踏まえると、従来の初等家庭科教育法の授業計画では実施困難性が3点浮かび上がってくる。

1点目は、根本的な課題として、対面でこそこそできる学生の反応を踏まえた授業作りが難しくなることが予測される。各授業に出席している学生の特性をその都度把握し(診断的評価、形成的評価の機能に当たる)、毎時間授業を改善しながら、実施することが難しい。双方向でのオンライン授業(例えば、ZoomやSkypeなどを用いた授業)も難しいため、オンデマンド型の授業設計にせざるを得ない<sup>3)</sup>。他方、従来の対面授業では、学生の実態、授業ニーズの把握については、これまで紙媒体で行ってきたが、オンラインのアンケートフォームなどを利用することで、収集、データの整理は容易にできるため、事前に調査を行う必要があると考える。2点目は、オンライン授業を実施するだけの情報リテラシーを担当教員が身につけていない点にある。先述したように本学では、LMS(Learning Management System)であるMoodleを採用しており、オンライン授業ではそのツールを用いて実施されることが推奨されている。しかし、初等家庭科教育法を今年度担当する教員はMoodleの使用経験がほぼなかったため、それぞれでMoodleを活用し、従来のように各自で授業を実施することが困難であることが事前に推察された。

3点目は、授業の核である模擬授業をどのように実施するかという点である。教育職員免許法及び同施行規則の一部改正に基づき、全国すべての教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示した教職課程コアカリキュラムが作成された(文部科学省, 2017)。全オンライン授業への移行状況において、「教科及び教科の指導法に関する科目」における到達目標の達成を目指すためには、「(2)当該教科の指導方法と授業設計」の「4 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身につけている」があり、コアカリキュラムにおける到達目標の達成に迫っていくためにも、オンライン授業で模擬授業をどのように実施していくのか検討する必要がある。

以上を踏まえると、学生の実態を踏まえて授業を設計し、全教員が持続可能な形で授業を開講及び実施するためには、(1)学生の実態把握を行い、(2)オンライン授業の範囲について検討し、(3)到達目標に可能な限り接近できるような授業設計を再検討したシラバスの作成が必要であると考えられる。

表 1 初等家庭科教育法の開講状況

	開講曜日時間	コース	学年
前期	月曜2限	特別支援	3年生
	月曜3限	小学校理科教育コース	3年生
	水曜6限	夜間コース	
	木曜1限	学校教育コース	2年生
		小学校家政教育コース	
	金曜2限	小学校国語教育コース	2年生
		小学校音楽教育コース	
		初等教育教員養成幼児教育専攻	2年生
	月曜2限	小学校英語教育コース	3年生
		小学校数学教育コース	3年生
後期	月曜3限	小学校美術・書道教育コース	3年生
		小学校保健体育コース	
	水曜6限	夜間コース	
	金曜2限	小学校社会科教育コース	2年生
		初等教育教員養成小学校教育専攻	

表 2 2020 年度改訂前初等家庭科教育法のシラバス（授業の計画）

時数	学修内容
1	家庭科の意義と特性
2	家庭科教育の歴史
3	学習指導要領の目標と内容構成および他教科との関連
4	カリキュラムマネジメント：学習指導案と年間指導案の作成
5	教材開発及び指導方法の工夫
6	家族・家庭生活の教材を考える
7	「食生活の教材を考える」
8	「衣生活の教材を考える」
9	「住生活の教材を考える」
10	「消費生活と環境に関する教材を考える」
11	「実験・実習を用いた授業」及び「五感で学ぶ授業」
12	「主体的・対話的に深く学ぶ授業」及び「問題解決型の学習を取り入れた授業」
13	模擬授業と振り返り(1)個人評価と相互評価
14	模擬授業と振り返り(2)評価規準・基準とルーブリックの作成
15	授業の総括：「家庭科教育の展望」

### 3. 研究の目的

本研究の目的は、同時期に複数時間開講されており、なおかつ複数の教員で担当（非常勤講師も含む）する初等家庭科教育法を全オンライン授業で円滑に運営・実施することを目指して、学生の実態を踏まえてシラバスを検討し、大阪教育大学初等家庭科教育法のモデルシラバスを作成することである。加えて、今後のオンライン授業開発のための資料とすることである。

## II 研究の方法

### 1. 方法の概要

本研究は、シラバスを全オンライン授業に対応させるために、まずは学生への事前調査を基に学習者の実態やニーズについて把握する。その結果を踏まえて、担当でシラバスの検討を行い、改訂版シラバスを作成する。授業開始後は担当者5名が週に1度遠隔会議を行い、講義内容を確認し、学生の課題等について共有する。

#### 1.1. 事前調査の概要

事前調査は、講義の第1回のオリエンテーション内で実施した。調査は、Office 365にあるFormsを用いて

実施した。学生には、アンケートが授業成績に反映しないこと、オンライン授業に向けての資料にすること、事前及び事後調査を比較することで自身の学びの変容に活用することができることを説明した上で回答させた。アンケートフォームは、授業ごとに作成し（図1）、Moodle上にリンクを貼り付けた。

質問項目としては、①学籍番号、②これまでの家庭科の記憶（小中高校での家庭科の授業を憶えていますか？）、③家庭科に対する好意度（小学校の家庭科の授業は好きでしたか？）、④各授業の好意度（これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？：調理実習、被服実習（小物作り、ミシンでの製作など）、買い物や洗濯等の体験実習）、⑤家庭科教育への意欲（小学校で家庭科を教えたいと思いますか？）、⑥家庭科の必要性（小学校の家庭科は必要だと思いますか？）、⑦家庭科の授業実施の自信（小学校で家庭科の授業をする自信がありますか？）、⑧家庭科の学びの自身の家庭生活への影響（これまでの家庭科で学んだことを自分の生活に活かすことができますか？）、⑨生活を営む上での家庭科の有用感（これまでの生活の中で、「家庭科を学んでよかった」と感じたことがありますか？）、⑩授業のニーズ（本授業で学びたいことはなんですか？複数回答）の10項目である。授業のニーズは、「A 家庭科教育の歴史や理念」「B 初等教育において家庭科が果たす役割」「C 小学校家庭科で扱う学習内容」「D 小学校家庭科で扱う指導方法・評価」「E 生活課題に即した教材研究」「F 児童の実態を踏まえた授業の構成」の6項目を設定した。この6項目は、改訂前シラバスですでに学生へ提示していた到達目標より設定した。授業ニーズについては、複数回答でチェックを入れさせた。それ以外の質問項目については、4件法で回答を求めた。調査は、2020年4月20日、22日、23日、24日に初回の授業と合わせて行った。受講生は、履修登録上は、5授業で計227人が履修している。事前調査に回答した学生は207人（92.4%）である。

質問②から⑨は、全体で集計する。2年生と3年生の集計結果については、平均値を対応のないt検定により比較を行う。質問⑩については、選択した数を $\chi^2$ 検定により比較を行う。

**初等家庭科教育法（月曜2限） 事前アンケート**

このアンケートは、講義の評価には反映するものではありません。  
みなさんの家庭科に対する率直な意見や思いを回答してください。  
このアンケート結果は、今後の授業の構成の参考や家庭科教育の研究に使用します。  
また、みなさん自身の家庭科の学習経験の振り返りにも活用することができます。  
講義の最後にも同様のアンケートを実施するので、ご協力お願いします。

1. 学籍番号を入力してください \*

回答を入力してください

2. 小中高校での家庭科の授業を憶えていますか？ \*

☐ 憶えている

☐ やや憶えている

☐ あまり憶えていない

☐ 憶えていない

図1 Forumにおけるアンケートフォームの一部

## 1. 2. 改訂版シラバス作成の方法

事前調査の結果を踏まえて、学生の家庭科観やオンライン授業を受講する学生の環境・担当者の対応環境などを整理してシラバスを改訂する。可能な範囲で本来の到達目標に迫ることができるように配慮する。

## Ⅲ 事前調査の結果

事前調査の集計結果を表3にまとめる。家庭科教育への意欲（小学校で家庭科を教えたいと思いますか？）と家庭科の授業実施への自信（小学校で家庭科の授業をする自信がありますか？）の2項目以外は、概ね好意的な回答であった。教育実習経験のない学生が大半を占めていることもあってか、意欲や自信は低い結果であつた。

た。また、調理実習の好意度、家庭科の必要性は高い結果であった。調理実習の好意度は、志村・大橋(2008)の調査でも心に残っている家庭科の授業において「調理実習・実験」が最も多かった。佐藤ら(2012)は、大学生入学時における家庭科を教えるときにおさえておきたい内容に対する自己評価を分析した。特に調理実習や被服実習など技術に関する内容は高い傾向にあった。

次に、本授業を受講する2年生、3年生の事前調査結果の比較を表4にまとめる。質問②から⑨までの8項目すべてで有意な差が認められなかった。家庭科観や家庭科の捉え方などに学年間の差は認められなかった。

最後に、質問⑩の授業ニーズについて、AからFまでの項目の集計結果を表5に整理した。最も多く選択されたのは、D小学校家庭科で扱う指導方法・評価で83.6%であった。次に、F児童の実態を踏まえた授業の構成で77.8%であった。いわゆる授業に関わる専門的な知識や技能に対する学修ニーズが確認された。この2点については、学生の学修意欲に関わるため、シラバス改訂において重視する視点とした。表6に授業ニーズの学年比較を整理した。学年間では、他の質問項目と同様に、授業のニーズに関して有意な差は確認することはできなかった。

以上より、事前調査から全体的な傾向や実態は把握することはできたものの、学年差は確認されなかった。シラバスを改訂するに当たって、クラス間での指導展開や学修内容に差をつけるのではなく、オンライン環境などを配慮した上で共通の内容で実施できると判断し、前期5クラス共通シラバスで進めることにした。

表3 質問項目②～⑨の集計結果

質問項目	Mean	S.D.
② 小中高校での家庭科の授業を憶えていますか？	3.05	0.60
③ 小学校の家庭科の授業は好きでしたか？	3.30	0.74
これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(調理実習)	3.72	0.58
④ これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(被服実習)	3.14	0.99
これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(買い物、洗濯)	2.97	0.78
⑤ 小学校で家庭科を教えたいと思いますか？	2.78	0.81
⑥ 小学校の家庭科は必要だと思いますか？	3.83	0.43
⑦ 小学校で家庭科の授業をする自信がありますか？	2.05	0.66
⑧ これまでの家庭科で学んだことを自分の生活に活かすことができますか？	3.00	0.71
⑨ これまでの生活の中で、「家庭科を学んでよかった」と感じたことがありますか？	3.35	0.69

N=207

表4 質問項目②～⑨の学年比較

質問項目	2年生(N=84)		3年生(N=94)		t値
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
② 小中高校での家庭科の授業を憶えていますか？	2.94	0.56	3.19	0.59	0.25
③ 小学校の家庭科の授業は好きでしたか？	3.25	0.72	3.37	0.77	0.12
これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(調理実習)	3.62	0.72	3.82	0.41	0.20
④ これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(被服実習)	3.25	0.91	3.03	1.09	-0.22
これまで受けてきた小学校の家庭科の実習は好きでしたか？(買い物、洗濯)	3.05	0.71	2.98	0.81	-0.06
⑤ 小学校で家庭科を教えたいと思いますか？	2.70	0.80	2.80	0.85	0.10
⑥ 小学校の家庭科は必要だと思いますか？	3.85	0.36	3.84	0.47	0.00
⑦ 小学校で家庭科の授業をする自信がありますか？	1.94	0.64	2.13	0.67	0.19
⑧ これまでの家庭科で学んだことを自分の生活に活かすことができますか？	2.92	0.62	3.10	0.70	0.18
⑨ これまでの生活の中で、「家庭科を学んでよかった」と感じたことがありますか？	3.21	0.69	3.59	0.55	0.37

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 5 授業ニーズの集計結果

質問項目	人数	割合(%)
A 家庭科教育の歴史や理念	24	11.6
B 初等教育において家庭科が果たす役割	108	52.2
C 小学校家庭科で扱う学習内容	139	67.1
D 小学校家庭科で扱う指導方法・評価	173	83.6
E 生活課題に即した教材研究	115	55.6
F 児童の実態を踏まえた授業の構成	161	77.8

N=207

表 6 授業ニーズの学年比較

質問項目	2年生(N=84)	3年生(N=94)	$\chi^2$ 値	p値
A 家庭科教育の歴史や理念	7	13	1.19	0.27
B 初等教育において家庭科が果たす役割	42	53	0.34	0.56
C 小学校家庭科で扱う学習内容	52	69	0.86	0.35
D 小学校家庭科で扱う指導方法・評価	71	80	0.00	0.97
E 生活課題に即した教材研究	51	42	2.18	0.14
F 児童の実態を踏まえた授業の構成	68	71	0.17	0.68

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 

#### IV 改訂版シラバスと期待される効果

##### 1. 改訂版シラバス及び授業の概要

前章では、事前調査から全体的な実態把握はできたが、学年差については確認されなかったことを踏まえて、シラバス改訂に反映した視点について考察する。改訂版シラバスの内容は表 7 に示す通りである。

まず、学修内容についてである。授業ニーズのD・Fの項目を選択した学生が多かったことから、指導法と評価、児童の実態を踏まえた授業づくりを中心にシラバスを構成することにした。質問項目の⑤家庭科教育への意欲（小学校で家庭科を教えたいと思いますか？）、⑦家庭科の授業実施の自信（小学校で家庭科の授業をする自信がありますか？）の回答結果が低い傾向にあることを踏まえ、具体的な授業イメージが持てるよう、理論だけではなく具体的な実践を紹介するように工夫した。

次に、模擬授業の代替案やオンライン授業を通じた学生への継続的な動機付けについてである。双方向でのオンライン授業は学生と教員双方の負担が大きく困難であると判断し、オンデマンド型授業とした。オンデマンド型では、毎時間学生の学びの深まりや反応については、リアルな情報を得ることができない。そこで、学生の授業に対する動機付けや学びを継続させるために、最終的な課題としてパフォーマンス課題<sup>4)</sup>を設定した。課題のシナリオは、このコロナ禍における学校教育を想定して、「あなたは小学校の家庭科を担当しています。緊急事態宣言を受けて、家庭で自粛中の児童に向けて家庭科を学習することができるデジタルコンテンツを作成しなさい。なお、通常に戻った際にも授業で利用できることを想定し、そのデジタルコンテンツを用いた授業案も併せて作成すること。」とした。この課題解決を目指して、各授業を受講できるように、第3回目の授業<sup>5)</sup>で課題と今後の授業の流れを示す（図2）。パフォーマンス課題に必要な知識やスキルについては、主に第4回から第9回で学修する。そこで、各授業でどのようにパフォーマンス課題と関連があるか、本時で学修したことがパフォーマンス課題にどう影響するか、などの解説も盛り込み、各回の学修が最終的な課題につながっていることを意識づけ、学生の課題への動機付けを向上させることができるよう配慮した。このような工夫により、学生及び教員が継続的かつ意欲的にオンデマンド型中心のオンライン授業に参加できると考える。

成績評価の方法についても、改訂前はレポート課題（40%）、学習指導案と小テスト（50%）、授業への参加

状況(10%)と提示していたが、オンライン授業の計画に基づいて、参加状況(オンラインコメント等)(10%)、ワークシート(20%)、作成したデジタルコンテンツ教材に基づく学習指導案(40%)、小テスト(30%)と変更した。全オンライン授業を踏まえ、かつパフォーマンス課題を実施するため、デジタルコンテンツの作成を成績評価の方法に新たに追加した。パフォーマンス課題としての学習指導案とデジタルコンテンツについては、5名の教員で共通理解を図った上で、予備的ルーブリック(表8)を学生にあらかじめ提示することによって、成果物の質の向上をめざした。また、事後の評価としては、5名の教員がアンカー作品としてルーブリック2と3の作品を交流することによって、ルーブリックの再考も視野に入れた上で、評価の妥当性を保つこととした。一方で、すべての授業を一方向で進めていった場合、学生の学びの深まりや疑問点を解決することは難しいと考える。そこで、第11回の課題作成段階において学生から質問を募集し、第12回の授業で質問への回答スライドを作成することとした。また、第13回の授業開始までに提出された課題の一部を紹介し、学生の考えを共有する場面も設定した。回答スライドについては、全教員で質問を集計し、回答を考える予定である。紹介する課題については、担当教員の裁量で選択することとした。また、毎時間の受講後に該当授業への感想や考えたことなどを回答させ、学生の学びについて教員が確認できるようにした。

表7 改訂版シラバス

時数	学修内容
1	家庭科教育に求められる意義と特性について理解する
2	家庭科の学習内容を理解する
3	新学習指導要領(家庭)の記述内容を理解する
4	家庭科教育の充実を図るカリキュラムについて理解する
5	家庭科の題材計画と生活課題について理解する
6	家庭科の教材(デジタルコンテンツを含む)を理解する
7	学習指導案の作成方法を理解する
8	家庭科の評価について理解する
9	実践的・体験的学習(実習など)に関する授業設計を理解する
	デジタルコンテンツを用いた授業設計について理解する
	【パフォーマンス課題】
10	あなたは小学校の家庭科を担当しています。現在の緊急事態宣言を受けて、家庭で自粛中の児童に向けて家庭科を学習することができるデジタルコンテンツを作成しなさい。なお、通常に戻った際にも授業で使用できることを想定し、そのデジタルコンテンツを用いた授業案も併せて作成すること。
11	家庭科のデジタルコンテンツの作成(質問受付)
12	デジタルコンテンツを用いた授業案の作成 (質問に対するコメント返却・学習指導案作成)
13	教材及び学習指導案の提出 家庭科の歴史について理解する
14	模擬授業または教材評価
15	授業の振り返り 小テスト、授業後のアンケート

下線は、筆者が追加

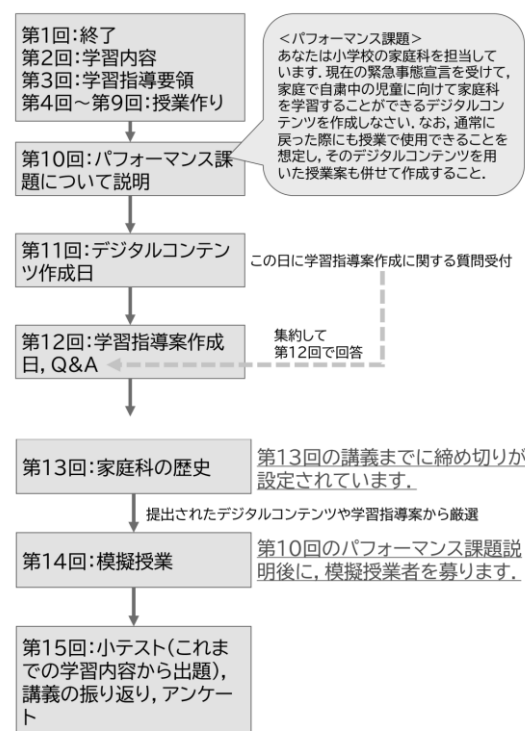


図 2 学生に提示した授業の流れ図

表 8 パフォーマンス課題の予備的ルーブリック

家庭科のねらいや特性		コンテンツのわかりやすさ 児童の興味関心を引きつける工夫	
4	3を満たしており、なおかつオリジナリティーに富んでいる作品		
	見方・考え方（健康・快適・安全、協力・協働、持続可能な社会の構築、生活文化の継承・創造）を踏まえた上で、学習内容を明確に設定している	視覚的にも児童が見やすく、わかりやすい工夫がされている（合理的な配慮も含めて） 興味関心を高める工夫がされている	
3			
2	学習内容を明確に設定している	わかりやすく、視覚的な支援もできている	
1	学習内容が明確ではない	わかりにくい、見にくい	

2. 期待される効果

全オンライン授業への移行に伴い、教員間で綿密にコミュニケーションをとりながら授業運営を行っていくことによる効果について整理すると次の3点にまとめられる。

1点目は、これまで初等家庭科教育法の授業は、共通シラバスではあったが、運用や教材、成績評価の方法等はそのクラスの担当教員に委ねられていた。今回は、全員でシラバスを練り上げたことによって、教員自身の学びも深まり、講義内容もこれまで以上に充実したものになった。Moodle などシステムの使用に関しては、専任教員が積極的に学内のオンライン授業に関する講習を受講し、使用方法の伝達や細かな作業を担当することで、非常勤講師の先生方の不安やトラブルを解消した。また、昨年度の担当者は、昨年の学生の実態や反応を踏まえて授業作りに反映させることができた。担当教員全員が学校現場での家庭科の指導経験を有していることから、具体的な事例を豊富に盛り込み、教育現場の実態を踏まえたシラバスになっている。換言すると、担当教員の総力を結集したシラバスに改良できた点である。

2点目は、ICT の導入である。これまでも推奨されてはいたが、レポート提出などが紙媒体ではなくなった



ことや、作成教材をデジタルコンテンツにすることで、学生自身の情報活用能力育成にも寄与する。また、Moodle や Office365 を用いることで円滑に課題の収集などを行うことができる。

3 点目は、小中高の家庭科の振り返りをアンケート形式にして、その結果を集計して、学生にすぐにフィードバックできたことによる新たな学びの創出である。家庭科の学習は、子どもたちの実生活からスタートさせること、子どもたちの現状把握が大切であることを講義の中で触れている。今回の共通講義の中で、全クラスのアンケート結果を共有することは、学習レディネスや現状把握の大切さを受講生自身が実感できる機会になったのではないかと推察される。

## V 今後の課題

今後の課題は、3 点挙げられる。まず、改訂版シラバスによる全オンライン授業の学修効果について検証することである。最終的な課題や小テスト、毎時間の振り返りなどを分析し、到達目標にどの程度迫ることができたかを明らかにしていく。2 点目は、改訂版シラバスを踏まえた授業計画をさらによりよいものにしていくため、学習効果を踏まえて再検討を行うことである。特に、この COVID-19 の影響により、国民の生活様式は大きく変化せざるを得ない状況となった。そのような現状も踏まえて、学生自身がこの生活や生活課題をどのように捉えていき、将来行うであろう家庭科の授業へ繋げていくか、という視点を深めていける工夫について検討したい。3 点目は、本来の対面授業では、表 1 にあるように、クラスによって学生の所属コースは異なる。今回の事前調査は、学年間での家庭科の捉え方やニーズなどに有意な差は確認されなかったが、今後はクラスごとに分析し、専攻コースによって学習レディネスがどのように違うのか、変わらないのかなど、各クラスの実態に即したオンライン授業の可能性についても検討していきたい。

## 注釈

- 1) 2020 年 4 月 22 日付で大阪教育大学ホームページより情報発信されている。  
(<https://osaka-kyoiku.ac.jp/faculty/kyomu/r2zenki4022.html>, 2020. 5. 16. 最終アクセス)
- 2) 大阪教育大学令和 2 年度入学生用履修便覧より抜粋した。
- 3) 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部サイバーメディアセンターが公開している「オンライン授業実践ガイド」では、オンライン授業を「非同時型 あとから視聴」「同時型 リアルタイム」に分けている。本研究では、「非同時型 あとから視聴」に分類される授業が実現可能であると考えた。  
(<https://www.dropbox.com/s/1lfujpclc0qapst/オンライン授業実践ガイドver4.pdf?dl=0>, 2020. 5. 19. 最終アクセス)
- 4) パフォーマンス課題とは、さまざまな知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような複雑な課題とされている(西岡, 2015)。
- 5) 2020. 3. 31. 付けでは、5/9 までオンライン授業とされていた。そのため、第 4 回以降は全オンライン授業則った授業計画であるため、第 3 回で今後の授業計画を説明した。

## 引用文献

- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 教職課程コアカリキュラム  
 永田智子, 鈴木真理子, 中原淳, 西森年寿, 笠井俊信 (2003) 家庭科教員養成のための新しい授業の試みとその検討: CSCL 環境下での多様な社会的相互交流, 日本教育工学会論文誌, 27(Suppl), 201-204  
 西岡加名恵 (2015) 教育評価とは何か, 西岡加名恵・石井英真(編), 新しい教育評価入門一人を育てる評価のために, p. 10, 有斐閣: 東京  
 佐藤ゆかり, 吉澤千夏, 佐藤悦子, 得丸定子, 細江容子, 光永伸一郎 (2012) 教員養成課程学生の入学時到達度調査からみた家庭科教育の課題, 日本家政学会, 63(8), 451-460  
 志村結美, 大橋寿美子 (2008) 大学生の家庭科観, 山梨大学教育学部附属教育実践研究, 13, 127-139

## Syllabus Suggestion for Home Economics for Elementary Education Corresponding to All Online Classes

MURATA, Shintaro<sup>1</sup>, OHMOTO, Kumiko<sup>1</sup>, KISHIDA, Ranko<sup>2,3</sup>, MINAMI, Chisato<sup>3,4</sup>, and WADA, Hiroko<sup>3</sup>

<sup>1</sup> Home Economics Education Division, Health and Safety Education

<sup>2</sup> Kyoto-city General Education Center

<sup>3</sup> Osaka Kyoiku University, Part-time teacher at Osaka Kyoiku University

<sup>4</sup> Hirano Elementary School attached to Osaka Kyoiku University

The purpose of this study is to study syllabi based on an actual situation with students and to create a revised syllabus aiming at a smooth administration and implementation for all online classes. In addition, it is necessary to create materials for future online lesson creation. Home Economics for Elementary Education is offered for multiple hours at the same time and is taught by multiple teachers (including part-time teachers). Therefore, in order to understand students' actual situation, we created and collected an online questionnaire. As a result, we were able to understand the tendencies of home economics as well as the related way of thinking and learning needs. A common syllabus was created because no significant differences could be confirmed between grades.

**key words:** home economics in elementary school, teacher training, online class, home economics for elementary education, performance task